

原著

## 中山間地域の市町村に勤務する中堅期保健師が 実践経験を通じて得ている学び

Learning from Practical Experiences of Mid-Career Public Health Nurses  
Working at Municipalities in Hilly and Mountainous Areas

御子柴裕子, 下村聡子, 安田貴恵子, 柄澤邦江, 酒井久美子, 中林明子  
Yuko MIKOSHIBA, Satoko SHIMOMURA, Kieko YASUDA, Kunie KARASAWA,  
Kumiko SAKAI, Akiko NAKABAYASHI

キーワード：中山間地域, 中堅期保健師, 市町村保健師, 学び, 実践経験, 現任教育

### 要旨

中山間地域の市町村に勤務する中堅期保健師が、保健師活動の実践経験を通じて得ている学びを明らかにし、現任教育の方策を検討した。経験年数10-20年の保健師10名に半構成的面接を行って得られた44件の学びは【個人・家族の持つ力を引き出し、高める援助】【要支援者を支える地域の力の向上】等の7カテゴリーに、35件の実践経験は【保健師の意図と異なる反応が示されたことで自らの援助を省みた】【熟練者の援助と対象者の変化を結び付けて理解した】等の16カテゴリーに整理された。実践経験のカテゴリーはさらに、学びを得た経験をするようになった9つの契機に整理された。中山間地域の市町村に勤務する中堅期保健師は、広範囲にわたる受け持ち地域や業務において試行錯誤する過程で、経験を振り返り意味付けることで、実感を伴う学びを得たり、保健師活動の基盤となる考えを深めたり、目指す方向性を見出したりしていた。以上より、現任教育として、日常業務を通じた職場内研修（OJT）により実践経験を振り返る機会を持つことの重要性と、保健師の成長目標を段階的に示す必要性が示唆された。

### Abstract

The purpose of this study was to clarify the learning from practical experiences of mid-career public health nurses (PHNs) working at municipalities in hilly and mountainous areas. We also aimed to find the strategy of in-service training. Semi-structured interviews were conducted with ten PHNs having 10-20 years of experience in the profession. The forty-four contents of learning were grouped into seven categories about as follows, "Support to individuals and families for bringing out and enhancing their potential" "Empowerment of the community's power for residents in need of support". The thirty-five contents of practical experiences were grouped into sixteen categories about as follows, "Reflection on their own support by the response different from what they expected" "Understanding through relating the help of experienced professionals to the change of their subject". Furthermore, these practical experiences' categories were grouped into nine opportunities. Mid-career PHNs working at municipalities in hilly and mountainous areas acquired learning with the realization that they developed thinking about foundation for the PHN, and found a direction for goal during the course of learning by mistake through the wide range of work and territory. Regarding the in-service training, we suggested the importance of opportunities to reflect on the PHN's practical experiences through the on-the-job training (OJT), and the need to indicate the step-by-step development objective as PHN.

受付日：2015年6月29日 採択日：2015年12月24日  
長野県看護大学 Nagano College of Nursing

## I. はじめに

保健師の現任教育の充実が喫緊の課題であり、これまでにも行政保健師のキャリア開発のための課題検討<sup>1)</sup>や、キャリアラダーに対応した研修内容の開発<sup>2)</sup>等の取り組みがなされてきた。平成22年4月に「保健師助産師看護師法」および「看護師等の人材確保の促進に関する法律」が改正され、新人看護専門職員の卒後臨床研修が努力義務化された。このことを受けて、平成23年2月には保健師を対象とした新人看護職員研修のガイドライン<sup>3)</sup>が出され、翌24年3月には中堅期保健師の人材育成に焦点を当てたガイドライン<sup>4)</sup>が提示された。これらの指針は、保健師のキャリア形成における中核的な内容を網羅している点では参考になるが、実際の行政現場においては、保健師の所属する自治体の規模や人口構成の特徴、健康課題の特性等を考慮した人材育成計画が検討されるのが望ましいと考える。とりわけ、中山間地域にある自治体においては、開催地までの距離の遠さにより研修会に参加しにくい背景があること<sup>5)</sup>や、少人数の職場であるがために、勤務を外れて職場外教育(Off-JT)を受けることが困難であることが推測される。そのため、日常業務を通じた職場内研修(OJT)の充実がとりわけ必要であると考えられる。

新任期保健師の職場適応や実践能力に関する議論においては、新任期保健師のロールモデルとなる中堅期保健師の役割の重要性が確認されている<sup>2) 4)</sup>。また、保健師のベストプラクティスの分析からは、保健師の専門性を継承する効果的な方法として、職場内での現任教育を行うことが不可欠であり、中堅期保健師に対する期待が述べられている<sup>6)</sup>。このように、中堅期保健師は、新任期保健師のプリセプターや業務遂行の中心的な役割を果たす等、職場組織における期待が大きく、多様な役割や能力発揮を求められている。しかしながら、中堅期にある保健師がこの時期において、どのような実践経験からどのような学びを得ているのかについては、施策化に関わる技術・能力に特化した研究<sup>7)</sup>はあるものの、新任期保健師を対象とした研究<sup>8) 9) 10)</sup>に比べて報告は少なく、共有できる資料が少ない。このように、中堅期保健師が実践経験の中で得ている学びや、学びを得た実践経験の現状が明らかになれば、中堅期保健師の成長の過程が明らかとなり、中堅期の育ちを支える方策の検討資料を得ることができると考える。

そこで本研究では、中山間地域の市町村に勤務している中堅期にある保健師が、保健師活動の実践経

験の中で、具体的にはどのような実践経験からどのような学びを得ているのかを明らかにする。また、このことから、新任期を終え、中堅期としての実践能力の向上を目指した行政保健師の現任教育のあり方に関する示唆を得ることを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 用語の定義

#### 1) 保健師活動を通じての学び

保健師が実践経験を通じて得ている保健師活動に関する学びについて、松下らの先行研究で定義されている「保健師としての実践経験の中でつかんだ保健師として大事なことや保健師活動とは何かという考え」<sup>11)</sup>を用いた。

#### 2) 中堅期保健師

中堅期保健師の人材育成に関するガイドラインでは、中堅期保健師を経験年数5-19年とし、中堅前期(5-9年)、中堅中期(10-14年)、中堅後期(16-19年)に細分化している<sup>4)</sup>。また、佐伯らによる保健師のキャリアラダーでは、経験年数3-15年をラダーII、中堅期としている<sup>2)</sup>。本研究では、これらを参考にした上で、中堅期保健師を「経験年数5-20年の保健師」とした。

### 2. 対象者および選定方法

A県内において、農業地域類型区分の「中間農業地域」または「山間農業地域」を含む市町村および、これらに隣接する市町村に勤務する保健師のうち、保健師としての勤務経験が(育児休業期間も含めて)10-20年の中堅期保健師。本研究では、保健師自身が新任期のみならず中堅期にあたる期間の振り返りもできるように考慮した上で、勤務経験年数を10-20年に設定した。さらに、中堅期保健師の実践経験において、先輩保健師との関係のあり方も検討したいと考え、所属する自治体の人口規模は、保健師の複数配置を想定し得る10,000人以上とした。

保健師が所属する2市2町1村の保健衛生担当係長に対して、本研究の目的と方法および倫理的配慮について書面と口頭で説明を行い、2市1町1村より研究協力の了解を得た。各自治体の係長に所属する該当保健師の概数を尋ねた後、係長宛に研究協力の依頼文書を送付し、該当する保健師に手渡していただいた。その結果、本人から直接研究協力の承諾を得られた保健師10名を本研究の対象者とした。

### 3. 調査内容

#### 1) 対象者の属性

対象者の基本的属性として、年齢（年齢階級）、性別、現在の職位、保健師としての経験年数、保健師以外の職種での勤務経験の有無について尋ねた。

#### 2) 保健師活動の実践経験を通じた学びに関すること

保健師としての実践経験の中で“保健師活動としてこういうことが大事である、保健師活動とはこういうものである、という何かをつかんだ経験”に関して、以下の①②について尋ねた。

①具体的な実践経験の内容と、経験をするようになった契機。それは保健師何年目頃に経験したのか。当時の所属および担当業務。

②①からつかんだこと（学び）は何か。それは保健師何年目頃のことか。

### 4. 調査方法

前述の調査内容を聞き取るインタビューガイドを作成し、半構成的面接による個別面接調査を行った。対象者の属性のみ、事前質問用紙にまとめて面接前に対象者本人に送付し、記入済みの状態で面接当日に持参してもらって確認した。また、調査内容は、許可が得られた場合のみICレコーダーに録音し、許可が得られなかった際には聞き取りメモをとった。面接に要した時間は55-90分（平均68.0±10.1分）であった。なお、調査期間は2012年11月-2013年1月であった。

### 5. 分析方法

面接内容の逐語録または聞き取りメモを基に面接記録を作成した後、内容を確認するために対象者本人に送付し、了承されたものを分析対象とした。

最初に、実践経験を通じて得ていた学びについて、具体的な実践経験の内容と経験をするようになった契機、経験した時期、得られた学びの内容が読み取れるひとまとまりの記述を面接記録から抽出した。その後、学びの内容については、意味が損なわれないように要約したものを1件とし、内容の類似性に基づいて細項目、カテゴリー化して件数を示した。実践経験の内容についても、意味が損なわれないように要約したものを1件とし、内容の類似性に基づいてカテゴリー化した後、学びを得た経験をするようになった契機ごとにまとめ、件数を示した。1件の実践経験から複数件の学びが得られていたり、複数件の実践経験から1件の学びが得られていたりす

ることもあった。さらに、実践経験と学びの時期と件数について、それぞれ新任期（1-4年目）と中堅期（5年目以降）に分けて検討した。

なお、分析の信頼性・妥当性を確保するために、面接記録からの抽出、内容の要約およびカテゴリー化は、地域看護を専門とする複数の研究者で検討しながら実施した。さらに、分析結果については対象者本人の確認を得た。

### 6. 倫理的配慮

対象者には、研究の目的と方法、調査協力は自由意思に基づくこと、匿名性の保護、調査結果の公表等について文書で伝えた後、面接実施の際には再度、文書と口頭にて説明した。また、研究協力の意思表示の際には、対象者の上司を介在することなく、研究者に直接返答する方法を用いた。なお、本研究は、研究者が所属する大学の倫理委員会の審査を受け、承認を得て行った（承認番号2012-14）。

## Ⅲ. 研究結果

### 1. 対象者の属性

10名全員が女性であり、年齢構成は30-34歳3名、35-39歳4名、40-44歳1名、45-49歳1名、50-54歳1名であった。全員がスタッフ保健師であり、管理職に就いている者はいなかった。また、対象者が所属する市町村は、過去に行われた市町村合併等の名残もあり、小規模であっても保健師が支所等に分散配置されている状況や、複数の保健師が配属されている場合も通常業務は単独で行っている場合もみられていた。

保健師としての経験年数は12-19年であり、その内訳は、12-15年7名、16-19年3名であった。保健師以外の職種での勤務経験がある者は半数の5名で、その内訳は、看護師3名、看護職以外の勤務経験2名であった。

### 2. 保健師活動の実践経験を通じて得ていた学びの内容および件数

表1のとおり、面接内容から要約された学びの内容は44件であった。これらを類似性に基づいて細項目にまとめたところ、7つの学びの内容のカテゴリー（以下【 】で示す）【個人・家族の持つ力を引き出し、高める援助】【要支援者を支える地域の力の向上】【地域に根付いた保健師活動】【公衆衛生看護の原則の再認識】【地域の健康課題の明確化/施策化】【健康危機への対策】【福祉分野の保健師の

表1 保健師活動の実践経験を通じて得ていた学びの内容、および学びを得た時期

| 学びの内容の<br>カテゴリと件数  | 学びの内容の細項目   | 学びの内容の要約  | 学びを得た<br>時期 |
|--|---|---|-------------|
| 個人・家族の持つ<br>力を引き出し、高<br>める援助<br>19件                              | 対象者の問題対処能力を<br>高める関わりの重要性   | 対象者に徹底的に寄り添うこと、寄り添うだけでは解決しないので寄り<br>添いつつ、はっきりと伝えるタイミングを逃さない | 7年目         |
|  |   | 対象者が抱える健康課題について、対応方法を一緒に考える                                 | 8年目         |
|  |   | 対象者自身が健康課題に気付くという過程が大事                                      | 8年目         |
|  |   | 対象者自身が何に困っているのかを気付くことができるように関わるこ<br>とが大事                    | 9年目         |
|  | 対象者の意思決定力を尊<br>重した関わりの重要性   | 対象者自身が物事の判断をできるように、気持ちをよく聞いて、決めら<br>れるように支援する               | 5年目         |
|  |   | 対象者が保健師の考えと異なることを選択したとしても、その状況を客<br>観的にみる                   | 5年目         |
|  |   | 対象者の考えを尊重し、保健師側の思いを押し付けない                                   | 13年目        |
|  | 対象者と向き合い傾聴す<br>ることの重要性  | 対象者との適度な距離を持ちつつ、対象者の判断を待つことも大事                              | 13年目        |
|  |   | 短時間でも対象者としてしっかり向き合って話を聴くことが大切                               | 2年目         |
|  | 家族の意思決定を尊重し<br>た関わり   | 対象者の話の腰を折らないように話を聴く   | 特定困難        |
|  |   | 物事の判断が必要な場面で、家族の考えや判断を尊重する                                  | 4-6年目       |
|  | 対象者のニーズに即した<br>支援者へのつなぎ   | 生命の危機状態がない限り、家族の考えを尊重する                                     | 4-6年目       |
|  |   | 対象者にとって一番適切な人が関わるができるように連携すること<br>が大事                       | 9年目         |
|  | 援助の継続における責任<br>ある対応   | 対象者にとって最善の方法を考え、必要な関係者につなげて抱え込ま<br>ない                       | 13年目        |
|  |   | 保健師からの関わりが必要な人に対して、拒否的な反応がみられたと<br>しても、繰り返し訪問して声を掛ける        | 特定困難        |
|  | 乳幼児の成長発達と親の<br>関わりの重要性の理解   | 継続ケースについて、担当者が変わった際にも、きちんとつなげていく<br>ことが大切                   | 特定困難        |
| 乳幼児の成長発達と親の関わり方の重要性を具体的に理解した                                     |   | 1年目   |             |
| 個人と家族全体の両側面<br>からの支援方法の検討  | 個人だけでなく家族全体への支援方法を考える   | 1-5年目   |             |
| 複雑な問題を抱える事例<br>の支援のコツの会得   | 複雑な問題を抱えるケースの課題整理やケースワークの方法を学ん<br>だ                                 | 6-7年目   |             |
| 地域に根付いた保<br>健師活動<br>7件   | 家庭訪問の重要性の再確<br>認  | 家庭訪問を通して対象者の生活の場を捉えることが大事                                   | 6年目以降       |
|  |   | 日常の家庭訪問活動が重要である   | 12年目頃       |
|  |   | 家庭訪問を通して、地域に出ることが必要   | 特定困難        |
|  | 地域に密着した保健師活<br>動の実感   | 保健師活動について十分に理解していないことに気付き、保健師活動<br>にも色々な方法があると知った           | 7年目         |
|  |   | 地域に密着した保健師活動を実感した   | 7年目         |
| 住民との関わりの重要性<br>の認識   | 住民と関わるのが一番大事である   | 13年目  |             |
| 住民との信頼関係の維持<br>を意図した傾聴の重要性                                       | 先輩保健師たちが築いてきた住民との信頼関係を崩さないために、住<br>民の話をも聴くことが大事                     | 特定困難  |             |
| 要支援者を支える<br>地域の力の向上<br>7件  | 住民同士の支え合いを高<br>めることを意図した活動  | 障がいを抱えながらも地域で生活するためには、ボランティアの力が<br>大切で、担う住民の力を伸ばしていく        | 8年目         |
|  |   | 住民同士のつながりを大切にしながら事業を実施することで、地域に<br>根差した活動を展開する              | 11年目        |
|  |   | 住民同士のつながりを大切にしながら事業を実施することで、参加時<br>だけでなく、継続した健康づくりにつながる     | 11年目        |
|  |   | 地域住民と共に対象者を支えるための体制を整えながら、住民同士<br>で支え合える力を高めていく             | 14年目頃       |
|  | 地域をよく知る住民や関<br>係者との人脈づくり  | 地域住民について幅広く知るために、関係者や住民の中のキーパー<br>ソンとのネットワークを構築する           | 14年目頃       |
| 地域に潜在するケースを掴むために、住民が暮らしの中で気付いた<br>情報が重要であり、住民から情報を寄せてもらうことが必要である |   | 特定困難  |             |
| 迅速に対応できる支援<br>ネットワークの構築  | 個別支援の際に、緊急性が高く、すぐに支援体制を整えることが必要<br>であり、その時のために、関係者や住民とのネットワークを作っておく | 14年目頃   |             |

| 学びの内容の<br>カテゴリーと件数            | 学びの内容の細項目                       | 学びの内容の要約   | 学びを得た<br>時期 |
|-------------------------------|---------------------------------|--|-------------|
| 公衆衛生看護の<br>原則の再認識<br>5件       | 長期的な視点からの予防<br>活動の重要性           | 住民の疾病の発症や重症化の予防のために、早期に関わる   | 7年目         |
|                               |                                 | 10年、20年先のことを見越しながら予防活動を考えていく   | 10年目        |
|                               | 住民の健康生活を支える<br>ための住民や他職種と協<br>働 | 住民や他職種と協働しながら、健康の視点から住民の生活を支え、健<br>康づくりの手伝いをする                             | 2・5年目       |
|                               | 住民を中心に考えた精神<br>保健福祉活動           | 住民を中心として活動方法・内容を考える  | 8年目         |
|                               | 根拠に基づいた活動の重<br>要性               | 法律や施策の意味を理解し、体のメカニズムを押さえた科学的根拠に<br>基づいた活動をする                               | 9年目頃        |
| 地域の健康課題<br>の明確化／施策<br>化<br>4件 | 地域の健康課題の明確化<br>／施策化の重要性         | 地域の実態を分析して事業化、施策化することの大切さを学んだ  | 3年目         |
|                               |                                 | 専門医・開業医との検討や外部機関との連携等、地域の関係機関と<br>連携しながら活動する                               | 3年目         |
|                               |                                 | 地域の健康課題を施策へつなげる際に、保健師だけでは視野が狭く<br>なってしまうため、行政事務のプロが関わることで、より具体的に進行<br>する   | 14年目頃       |
|                               |                                 | 地域の健康課題へ施策へつなげて活動するのが保健師であり、ライフ<br>ステージを通して、それぞれの担当保健師と課題を共有することが<br>必要である | 16年目        |
| 健康危機への対<br>策<br>1件            | 災害時の保健師活動の考<br>察                | 災害発生時に保健師としてどのような動きが必要なのかを考えるよう<br>になり、意識が高まった                             | 6年目         |
| 福祉分野の保健<br>師の役割認識<br>1件       | 高齢者福祉分野における<br>保健師の役割の認識        | ケアマネジャーからの地域で暮らしている高齢者についての相談に対<br>応しながら、地域を作っていくことが役割                     | 14年目        |

役割認識】に整理された。各カテゴリーについて、主たる学びの内容の細項目を〈 〉で示しながら説明する。

#### 1) 【個人・家族の持つ力を引き出し、高める援助】

最も多い19件の学びの内容が9つの細項目〈対象者の問題対処能力を高める関わりの重要性〉〈対象者の意思決定力を尊重した関わりの重要性〉〈対象者と向き合い傾聴することの重要性〉〈家族の意思決定を尊重した関わり〉〈対象者のニーズに即した支援者へのつなぎ〉〈援助の継続における責任ある対応〉〈乳幼児の成長発達と親の関わりの重要性の理解〉〈個人と家族全体の両側面からの支援方法の検討〉〈複雑な問題を抱える事例の支援のコツの会得〉に整理された。とりわけ多かったのは〈対象者の問題対処能力を高める関わりの重要性〉に関する学びであり、「対象者に寄り添いつつもはっきりと伝えるタイミングを逃さない」「対象者自身が健康課題に気付くという過程が大事」等の発言がみられていた。同様に多かった〈対象者の意思決定力を尊重した関わりの重要性〉に関する学びでは、「対象者自身の気持ちをよく聞いて、決められるように支援する」「保健師側の思いを押し付けない」等が述べられていた。また、〈家族の意思決定を尊重した関わり〉〈個人と家族全体の両側面からの支援方法の検討〉等に関する学びでは、個人のみならず家族

全体を視野に入れた援助の重要性について述べられていた。

#### 2) 【地域に根付いた保健師活動】

7件の学びの内容が4つの細項目〈家庭訪問の重要性の再確認〉〈地域に密着した保健師活動の実感〉〈住民との関わりの重要性の認識〉〈住民との信頼関係の維持を意図した傾聴の重要性〉に整理された。〈家庭訪問の重要性の再確認〉に関する学びでは、対象者の生活の場を捉えて援助を行う大切さについて述べられていた。また、〈地域に密着した保健師活動の実感〉に関する学びでは、小規模な職場への異動により、地域に密着した保健師活動についての理解を深めた発言が確認された。

#### 3) 【要支援者を支える地域の力の向上】

7件の学びの内容が3つの細項目〈住民同士の支え合いを高めることを意図した活動〉〈地域をよく知る住民や関係者との人脈づくり〉〈迅速に対応できる支援ネットワークの構築〉に整理された。最も多かったのは「障がいを抱えながら地域で生活するためにはボランティアの力が大切で、担う住民の力を伸ばす」「住民同士のつながりを大切にすることで、地域に根差した活動を展開し、継続した健康づくりにつながる」等の〈住民同士の支え合いを高めることを意図した活動〉に関する学びであった。〈地域をよく知る住民や関係者との人脈づくり〉

＜迅速に対応できる支援ネットワークの構築＞に関する学びにおいては、専門職だけでなく地域住民の力も借りて支援体制を整えることや、地域のキーパーソンとのネットワークを築くことの大切さについて語られていた。

4) 【公衆衛生看護の原則の再認識】

5件の学びの内容が4つの細項目＜長期的な視点からの予防活動の重要性＞＜住民の健康生活を支えるための住民や他職種との協働＞＜住民を中心に考えた精神保健福祉活動＞＜根拠に基づいた活動の重要性＞に整理された。高齢化率が高い地域において「10年、20年先を見越しながら予防活動を考えていく」という＜長期的な視点からの予防活動の重要性＞に関する学びや、健康の視点から＜住民の健康生活を支えるための住民や他職種との協働＞が必要との学び等がみられていた。

5) 【地域の健康課題の明確化／施策化】

4件の学びの内容が1つの細項目＜地域の健康課題の明確化／施策化の重要性＞に集約された。地域の実態を分析して事業化、施策化すること、地域の健康課題を施策へつなげること、保健師のみならず地域の関係機関等と連携しながら活動する等の内容の学びがみられていた。施策化のためには行政事務

職との協働が大切であることにも言及されていた。

その他にも【健康危機への対策】【福祉分野の保健師の役割認識】それぞれについて1件ずつの学びの内容がみられ、それぞれ細項目＜災害時の保健師活動の考察＞＜高齢者福祉分野における保健師の役割の認識＞に整理された。

3. 学びを得た実践経験の内容と経験をすることになった契機および件数

表2のとおり、面接内容から要約された学びを得た実践経験の内容は43件であった。これらを類似性に基づいてまとめた結果、16の実践経験の内容のカテゴリーに整理された。さらに、経験をすることになった契機ごとにまとめたところ、9つの契機に整理された。以下、実践経験の内容のカテゴリーを【 】で示し、経験をすることになった契機ごとに説明する。

1) 個別援助・家庭訪問

12件の実践経験の内容が4つのカテゴリー【保健師の意図と異なる反応が示されたことで自らの援助を省みた】【熟練者の援助と対象者の変化を結び付けて理解した】【経験を踏まえ意識して援助を行うことで成果を確認できた】【住民の反応から行政保

表2 学びを得た実践経験の内容と経験をすることになった契機、および経験した時期

| 学びを得た経験をすることになった契機と件数 | 実践経験の内容のカテゴリー                 | 実践経験の内容の要約   | 経験した時期 |
|-----------------------|-------------------------------|--|--------|
| 個別援助・家庭訪問<br>12件      | 保健師の意図と異なる反応が示されたことで自らの援助を省みた | 高齢者世帯の継続訪問ケースから、自分の援助に対する手紙が届いたことで、自身の態度を顧みた         | 2年目    |
|                       |                               | よかれと思って対応したが高齢者施設の入所後に家族から苦情が寄せられ自分の援助を振り返った         | 4-6年目  |
|                       |                               | 継続援助のケースから拒否的な態度がみられたり、関係が築けなくて終了となったことから自分の関わりを顧みた  | 5年目    |
|                       |                               | 継続援助を行っていたケースから拒否的な反応がみられたことで実施した援助を顧みた              | 13年目   |
|                       |                               | 対象者に感謝の言葉を伝えられて、自分が意図していなかった援助の意味を感じ取る               | 特定困難   |
|                       | 熟練者の援助と対象者の変化を結び付けて理解した       | 乳幼児虐待ハイリスク者の支援事業にスタッフとして関わり母親と子どもの変化を目の当たりにする        | 1年目    |
|                       |                               | 心理相談の事業担当者として相談者の状況と対応方法を臨床心理士から詳細に聞き取る              | 6-7年目  |
|                       |                               | 心理相談の事業担当者として、臨床心理士の対応と継続利用者の経過を結び付けて理解する            | 6-7年目  |
|                       |                               | 行政に不信感を持っていた虐待疑い事例に上司の保健師と一緒に知り、熟練した対応を見聞きする         | 7年目    |
|                       | 経験を踏まえ意識して援助を行うことで成果を確認できた    | 個別援助での以前の失敗体験を振り返り、自分の傾向や注意すべき点を意識して援助する             | 13年目   |
|                       |                               | 健診の要精検結果が続いている人に粘り強く繰り返して家庭訪問を行ったところ、変化が認められて受診につながる | 特定困難   |
|                       | 住民の反応から行政保健師への信頼を感じ取った        | 住民から行政保健師に対する信用や期待を示す言葉や態度が表現され、それを感じ取る              | 特定困難   |

| 学びを得た経験をするようになった契機と件数       | 実践経験の内容の<br>カテゴリー                             | 実践経験の内容の要約   | 経験した<br>時期 |
|-----------------------------|---|--|------------|
| 所属部署や職場の異動<br>6件            | 前任保健師が築いた活動を目の当たりにした                          | 担当地区の交代によりこれまで経験が少なかった高齢者の生活支援に他職種と一緒に関わる                      | 2-5年目      |
|                             |   | 担当地区が変わり、前任保健師が築いた地域づくりの成果を目の当たりにする                            | 2-5年目      |
|                             |   | 担当地区の異動により、保健師と住民・関係機関との密接な関係を体験し、保健師に対する期待を受けとめる              | 7年目        |
|                             | 求められる役割が拡大した                                  | 少人数の職場に異動したことで、役割が増え、自分の知識・技術をフルに活用して対応する                      | 7年目        |
|                             | 高齢者福祉部門への異動で多くの経験を積んだ                         | 地域包括支援センターへ異動することにより多くの関係機関と連携できたり、ケアマネジャーの研修に何回も参加したりした       | 9年目        |
| 保健予防領域の保健師活動を福祉領域から客観的にみつめた | 保健予防部門から高齢者福祉部門に異動後も、合同で行う事例検討会に参加して援助方法を検討する | 9年目  |            |
| 支援体制づくり・社会資源づくり<br>5件       | 関係職種や住民の協力を得ながら支援を充実させた                       | 独居高齢者に関わるホームヘルパーとの連絡会をとおして潜在しているケースを把握することができた                 | 6年目以降      |
|                             |   | 緊急性の高い高齢者事例の支援チームを整える過程で近隣住民による見守り体制ができた                       | 14年目頃      |
|                             |   | 近隣住民により見守り体制を活かして高齢者虐待防止マニュアルを検討する                             | 14年目頃      |
|                             | 自らの取り組みが障がい児・者の社会生活の拡大につながった                  | 障がい児・者の通所施設の立ち上げの過程で話をじっくりと聞きながら気持ちに寄り添う                       | 1-5年目      |
| 地域の健康課題の解決に向けた取り組み<br>3件    | 地域の健康課題の関連要因の解明や関係者の支援を検討した                   | 他地区に比べて多数発生している疾病の実態を調査して、要因分析や対策検討のプロジェクトに参加する                | 3年目        |
|                             |   | 地域福祉関係者と一緒に、世代を超えた認知症予防の取り組みに参加する                              | 10年目       |
|                             |   | 思いがけずケアマネジャーの支援担当となりケアマネジャーの困りごとを捉えながらケアマネジャーに役立つ支援を考える        | 14年目       |
| 災害発生時の支援活動・被災地での支援活動<br>2件  | これまでに経験したことのない状況に遭遇した                         | 自然災害発生後、初めて1人で避難所支援に行き対応に苦慮した経験と大規模な自然災害のニュースを結びつけて、保健師の対応を考える | 6年目        |
|                             |   | 震災被災地の支援活動として行った全戸訪問で初めて会う人の家にあげてもらった                          | 12年目頃      |
| 研修会への参加<br>2件               | これまでの保健指導や業務を深く振り返った                          | 研修会に参加して、対象者の生活実態を理解する必要性を学びこれまでの保健指導を振り返る                     | 8年目        |
|                             |   | 参加した研修会での内容を活かして、健診結果説明会を実施                                    | 9年目頃       |
| 保健事業への継続的な関わり<br>2件         | 目的達成のために企画・運営に工夫を凝らした                         | 精神障がい者の理解者・支援者としての活動につながるように工夫をこらしたボランティア養成講座を関係者とともに計画する      | 8年目        |
|                             |   | 担当者として工夫を重ねて取り組んだ教室の修了者が、その後も努力していることを知る                       | 11年目       |
| 他部署の保健師との連携<br>2件           | 保健活動が目指すことについて意見交換した                          | 保健計画策定のために他課の保健師と活動内容やねらいについて意見交換する                            | 16年目       |
|                             |   | 保健計画策定のために他課の保健師と話し合いライフステージを通じた保健活動ができているか考える                 | 16年目       |
| 行政組織における活動<br>1件            | 事務職上司の実務能力のもとで事業を推進した                         | 事務職上司のもとで、補助金を得てプロジェクトに関わった                                    | 14年目頃      |

【保健師への信頼を感じ取った】に整理された。

【保健師の意図と異なる反応が示されたことで自らの援助を省みた】経験では、予測していなかった出来事に遭遇した際に自らの対応を振り返った経験がみられていた。保健師の関わりを拒んだり否定し

たりする言動が援助対象者やその家族から発せられたことや、逆に、援助対象者に感謝の言葉を伝えられたこと等から、自ら行った援助の意味を考えたことが語られていた。

【熟練者の援助と対象者の変化を結び付けて理解

した】経験では、職場内の熟練保健師や保健事業で委嘱している心理職者と一緒に仕事をしたことが挙げられていた。一例として、乳幼児虐待の疑いのある事例に熟練保健師と共に援助を行った過程で、親の態度の変化につながった熟練保健師の言動に触れた経験が述べられていた。また、心理相談を担当する保健師の立場で臨床心理士と共に関わりながら、臨床心理士の対応と利用者の変化を結び付けて理解した経験もみられていた。

【経験を踏まえ意識して援助を行うことで成果を確認できた】経験では、保健師の思いが先に立って先走ってしまう自らの関わり方の傾向を自覚しながら援助を行った経験が挙げられていた。また【住民の反応から行政保健師への信頼を感じ取った】経験からは、「地域包括（支援センター）の保健師です」と自己紹介するよりも、「〇〇の保健師です」と自治体名を出す方が住民から良い反応が得られたことから、保健師に対する信用や期待を実感した経験が述べられていた。

## 2) 所属部署や職場の異動

6件の実践経験の内容が4つのカテゴリー【前任保健師が築いた活動を目の当たりにした】【求められる役割が拡大した】【高齢者福祉部門への異動で多くの経験を積んだ】【保健予防領域の保健師活動を福祉領域から客観的にみつめた】に整理された。

【前任保健師が築いた活動を目の当たりにした】経験では、保健師がこれまでに住民や関係機関と密接な関係を築いてきたことを、担当地区の異動から実感したり、高齢者の多い地区に担当が変わったことで求められる支援方法も変わったことを自覚したりしていた。【求められる役割が拡大した】経験では、少人数の部署に異動したことでチームリーダーの役割を考えながら仕事に取り組んだり、役割分担が増えたことで自分の力不足を努力で補ったりした経験が語られていた。【高齢者福祉部門への異動で多くの経験を積んだ】経験では、地域包括支援センターへの異動により幅広い体験ができたことについて述べられていた。【保健予防領域の保健師活動を福祉領域から客観的にみつめた】経験では、保健予防と福祉の合同での事例検討会において、保健予防領域の保健師が問題解決を急ぐあまりに介入しすぎているのではないかと気付いたことが挙げられていた。

## 3) 支援体制づくり・社会資源づくり

5件の実践経験の内容が2つのカテゴリー【関係職種や住民の協力を得ながら支援を充実させた】【自らの取り組みが障がい児・者の社会生活の拡大につ

ながった】に整理された。

【関係職種や住民の協力を得ながら支援を充実させた】経験では、地域住民も加わった要支援高齢者の見守り体制ができたプロセスや、家庭訪問した家で「近所に困っている人がいるから行ってくれ」と教えられたり、ホームヘルパーから要支援者の情報が届けられたりする等の、日頃の保健師活動を通じて地域の潜在ニーズを把握し対応したプロセスが語られていた。【自らの取り組みが障がい児・者の社会生活の拡大につながった】経験では、障がい児・者とその家族の話を傾聴し、相手の気持ちに寄り添うことで、作業所を立ち上げることができた過程について述べられていた。

## 4) 地域の健康課題の解決に向けた取り組み

3件の実践経験の内容が1つのカテゴリー【地域の健康課題の関連要因の解明や関係者の支援を検討した】経験に集約された。他地区に比べて発生数の多い疾病の対策を検討するプロジェクトに参加した保健師は「まだ経験の少ない自分にとってそのプロセスにメンバーとして参加したことは意味があった」と述べていた。その他にも、地域の福祉関係者と共に世代を超えた認知症予防に取り組んだ経験や、ケアマネジャーに対する支援の経験等が挙げられていた。

## 5) 災害発生時の支援活動・被災地での支援活動

2件の実践経験の内容が1つのカテゴリー【これまでに経験したことの無い状況に遭遇した】経験に集約された。自身が所属する自治体内で発生した災害時の支援経験と、東日本大震災での情報とを結び付けて保健師の支援を考えた経験や、被災地支援に赴いた際の住民との関わりの経験が含まれていた。

## 6) 研修会への参加

2件の実践経験の内容が1つのカテゴリー【これまでの保健指導や業務を深く振り返った】経験に集約された。研修会での学習内容を、保健師として住民に対して日頃から行っている活動と結び付けて考え、実際に行動に移していた様子が語られていた。

## 7) 保健事業への継続的な関わり

2件の実践経験の内容が1つのカテゴリー【目的達成のために企画・運営に工夫を凝らした】経験に集約された。生活習慣病予防教室の参加者の日々の保健行動が持続できることや、精神保健福祉ボランティア養成講座においてボランティアとしての活動が継続・充実する等の目標を達成することを目指して、事業の内容や方法に工夫を凝らして取り組んだプロセスが述べられていた。



#### 8) 他部署の保健師との連携

2件の実践経験の内容が1つのカテゴリー【保健活動が目指すことについて意見交換した】経験に集約された。高齢者福祉部門に所属する保健師は「健康増進計画策定のために、所属する課や係を越えて保健師が集まり意見を出し合ったことが、ライフステージを通じた保健活動を考えることにつながっていた」と述べていた。

#### 9) 行政組織における活動

1件の実践経験の内容が1つのカテゴリー【事務職上司の実務能力のもとで事業を推進した】経験に集約された。国から補助金を得て行う事業を事務職上司の下で実施したことが語られていた。

### 4. 実践経験と学びの時期および件数

#### 1) 学びを得た時期および経験した時期と件数の概要

表1および表2に、学びを得た時期および経験した時期を保健師経験年数で示した。実践経験と学びの時期は1年目から16年目までがあり、新任期のものと5年目以降の中堅期にあたるものが含まれていた。中には、複数年にわたっているものや新任期中堅期を跨いでいるもの、時期は特定できないというものもあった。

保健師活動の実践経験を通じて得ていた44件の学びのうち、1-4年目の新任期に得られた学びは4件、5年目以降の中堅期に得られた学びは30件であった。それ以外にも、新任期中堅期を跨いで得られた学びは4件、時期が特定できない学びは6件みられていた。

35件の実践経験のうち、新任期のものは3件、中堅期のものは24件であった。その他、新任期中堅期を跨いだ実践経験は4件、時期が特定できないものは4件であった。

#### 2) 新任期の学びと実践経験

新任期に得られた学びは「乳幼児の成長発達と親の関わり方の重要性を具体的に理解した(1年目)」「短時間でも対象者としっかり向き合って話を聴くことが大切(2年目)」「地域の実態を分析して事業化、施策化することの大切さを学んだ(3年目)」「専門医・開業医との検討や外部機関との連携等、地域の関係機関と連携しながら活動する(3年目)」であった。

新任期の実践経験では「乳幼児虐待ハイリスク者の支援事業にスタッフとして関わり母親と子どもの変化を目の当たりにする(1年目)」「高齢者世帯の継続訪問ケースから、自分の援助に対する手紙が届

いたことで、自身の態度を顧みた(2年目)」「他地区に比べて多数発生している疾病の実態を調査して、要因分析や対策検討のプロジェクトに参加する(3年目)」がみられていた。

#### 3) 中堅期の学びと実践経験

中堅期に得られた学びでは【健康危機への対策(6年目)】【地域に根付いた保健師活動(6年目以降-13年目)】【要支援者を支える地域の力の向上(8-14年目頃)】【福祉分野の保健師の役割認識(14年目)】等の項目に該当するものが目立っていた。

中堅期の実践経験として挙がっていたものは【(災害発生時の支援活動に従事して)これまでに経験したことの無い状況に遭遇した(6-12年目頃)】【関係職種や住民の協力を得ながら支援を充実させた(6年目以降-14年目頃)】【求められる役割が拡大した(7年目)】【(研修会への参加により)これまでの保健指導や業務を深く振り返った(8-9年目頃)】【(保健事業の)目的達成のために企画・運営に工夫を凝らした(8-11年目)】【高齢者福祉部門への異動で多くの経験を積んだ(9年目)】【保健予防領域の保健師活動を福祉領域から客観的にみつめた(9年目)】【経験を踏まえ意識して援助を行うことで成果を確認できた(13年目)】【事務職上司の実務能力のもとで事業を推進した(14年目頃)】【保健活動が目指すことについて(他部署の保健師と)意見交換した(16年目)】等のカテゴリーに該当するものが多くみられていた。

### IV. 考察

#### 1. 中山間地域の市町村に勤務する中堅期保健師が保健師活動を通じて得ていた学びと実践経験

##### 1) 保健師活動を通じて得ていた学びの内容と件数

保健師活動を通じて得ていた学びの内容には、【個人・家族の持つ力を引き出し、高める援助】【地域に根付いた保健師活動】等の“個人および家族への援助に関する学び”、【要支援者を支える地域の力の向上】【福祉分野の保健師の役割認識】等の“対象者個人と地域全体とを関連させた学び”、【公衆衛生看護の原則の再認識】【地域の健康課題の明確化/施策化】【健康危機への対策】等の“地域全体を対象とした活動方法に関する学び”が含まれていた。

“個人および家族への援助に関する学び”では、住民との信頼関係の構築等の対人援助の基本姿勢について実感を伴いながら理解しているものがみられたり、具体的な援助方法を身に付け、看護実践能力を高めた充実感がみられたりしていた。“対象者個

人と地域全体とを関連させた学び”や“地域全体を対象とした活動方法に関する学び”の内容からは、公衆衛生看護活動の中核となる考え方について、具体的な活動方法と共に体得していることが確認された。公衆衛生活動の中核となる考え方とは即ち、長期的な視点を持って予防活動に従事すること、あらゆる健康レベルにある人々の生活の質の向上を目指すこと、住民の持つ力や主体性を高めること、地域全体に貢献する体制やしきみづくりを目指すこと等であった。

学びの件数に着目すると、“個人および家族への援助に関する学び”は全体の半数以上を占めていた一方で、“地域全体を対象とした活動方法に関する学び”のうち【地域の健康課題の明確化／施策化】に関する学びは4件のみであった。平成25年に改定された「地域における保健師の保健活動に関する指針」では、住民個々の健康課題の把握にとどまらず、集団に共通する地域の健康課題を捉える視点の重要性が示されている<sup>12)</sup>。また、中堅期にある市町村保健師が獲得している施策化に関わる技術・能力に特化した先行研究でも、施策化全体のプロセスを一定の責任を持つ立場で実践するという経験が、施策化に関わる技術・能力の獲得に最も影響を与えるとされている<sup>7)</sup>。本研究は、対象者のこれまでの保健師としての実践経験を振り返り、“保健師活動としてこういうことが大事である、保健師活動とはこういうものである、という何かをつかんだ経験”について、面接を通じて言語化したものを質的に分析している。従って、本研究の結果は、対象者の印象に深く残っている内容が反映されている可能性が高いことが影響していると考えられる。

## 2) 保健師活動を通じて得ていた学びと実践経験の内容との関係

保健師活動の学びを得た経験をするようになった契機は、個別援助や家庭訪問、所属部署や職場の異動、支援体制づくりや社会資源づくり、地域の健康課題の解決に向けた取り組み、保健事業への関わり等、行政保健師として活動しているならば誰もが日常的に行っているものが挙げられていた。市町村中堅保健師の施策化に関わる技術や能力の獲得に影響を与えた経験に関する先行研究においても、「地域の実情を基に政策や社会の動向を押さえて施策を考える能力」や「調整や連携・協働に関する交渉力・関係構築力」等の獲得には日常の保健師活動経験が影響することが論じられている<sup>7)</sup>。その一方で、少数ではあるが、災害発生時の支援活動や被災地での

支援活動、研修会への参加等、これまでに経験の無い特殊な状況下であるからこそ強く印象に残っていたり、学びを得ることにつながったりしているものも確認されていた。

実践経験の内容に関してはいくつかの特徴がみられていた。例えば、【保健師の意図と異なる反応が示されたことで自らの援助を省みた】経験では、自らの失敗体験や困難体験を通じて、援助対象者への対応方法を真摯に振り返り、援助の意味づけを行っていた。その一方で、以前の失敗体験から自らの傾向を意識し、【経験を踏まえ意識して援助を行うことで成果を確認できた】経験もみられていた。また、所属部署や職場の異動により新しい環境に身を置くことになった保健師たちは、【前任保健師が築いた活動を目の当たりにした】経験を通じて、周囲からの期待を受けつつ、保健師である自らに新たに求められる役割を模索し、責任を果たすための取り組みを行っていた。

以上より、本研究では、個別の援助ニーズに対応する活動や保健事業の計画と実施、地域の健康課題の探索と対応の検討等、日常的な保健師活動が学びにつながっていることが確認された。保健師はこのような保健師活動の実践経験において、経験を振り返り意味付けることで、実感を伴う学びを得たり、保健師活動の基盤となる考えを深めたり、目指す方向性を見出したりしていた。

## 3) 中堅期にある保健師の学びと実践経験の件数および時期

本研究において、対象者である中堅期にある市町村保健師が学びを得ていた時期は、1年目から16年目までの非常に幅広い期間に渡っていた。そのうち、1-4年目の新任期に得ていた学びは主として対人支援の基礎となるものや、住民や他職種との協働の際に必要な視点に関するものであったが、僅か4件のみであった。このことは、新任期の頃はまず保健師業務を行うために必要なことを理解する時期であるために、学びとして認識している内容が挙げられなかったと推測する。保健師の専門職務遂行能力を経験年数群別に比較した研究においても、新任期、とりわけ1年目の自己評価が非常に低かったことが明らかとなっている<sup>13)</sup>。また、保健師は職務経験を重ねることにより自信を獲得している<sup>14)</sup>ことから、保健師としての経験が少ない新任期においては“保健師活動としてこういうことが大事である、保健師活動とはこういうものである、という何かをつかんだ”という自信に至ることが難しいとも推察される。

関山らの先行研究では、市町村保健師として入職後1年間の実践内容と到達目標に対する主観的達成度の報告の中で、達成度の高さには新人保健師が主体的に考える実践が関係すると述べられている<sup>10)</sup>。本研究の結果においても、新任期には初めての経験や想定外の出来事に遭遇した経験が多くみられており、それらに対して試行錯誤しながら取り組む様子が多く述べられていた。このように、試行錯誤する思考や姿勢が伴う実践経験は入職1年目に限らず、実践経験の質として重要であることが示唆された。

中堅期に得られた学びでは、これまでに大切と思っていたことを改めて再確認したものや、保健師活動の基盤となる体制を整えることに関するものが多くみられていた。学びを得た実践経験では、研修会への参加等を通じて、自身のこれまでの実践経験と新たに入手した情報とを結び付けて考える、いわば能動的な経験や、保健師自身がリーダーシップをとって取り組んだ経験等が確認されていた。市町村中堅保健師が施策化に関わる技術・能力の獲得において、施策化全体のプロセスを一定の責任をもつ立場で実践する経験が最も影響を与えていたとの報告<sup>7)</sup>もみられているが、本研究においても、責任ある立場でリーダーシップを発揮しながら取り組む経験は、施策化のプロセスのみならず、地域に密着した保健師活動を実感する学びの獲得にも影響を与えていたと考える。

経験年数20年以上の保健師を対象に実践経験からの学びをインタビューした研究では、市町村保健師は4-9年目の経験と学びが他の時期に比べて少なかったと報告されている<sup>11)</sup>。本研究では、4-9年目に得ていた学びは17件、実践経験は12件であった。対象となった保健師の経験年数が12-19年と異なるため、単純に比較することはできないが、学びも実践経験も他の時期に比べ決して少数ではない結果が確認された。その理由のひとつとして、先述のとおり、職務経験を重ねることにより自信を獲得した中堅期保健師は、日常の保健師活動を通じて、新任期には認識されなかった学びについて実感を伴いながら得ることができていたことが推測される。

#### 4) 中山間地域の市町村保健師の学びと実践経験の特徴

「地域福祉関係者と一緒に、世代を超えた認知症予防の取り組みに参加した」経験から「10年、20年先のことを見越しながら予防活動を考えていく」との学びを得ていた保健師は、高齢化率が高い地域で活動していた。山間へき地を有する市町村の保健

師の介護予防活動に関する先行研究においても、集落内で介護予防に取り組むためには、あらゆる保健福祉等の事業の場を活用し、集落内の住民や地区役員の中から介護予防の担い手を育成することが必要であると述べられている<sup>15)</sup>。高齢化や過疎化が急速に進む中山間地域においては、認知症高齢者やその家族への対応は喫緊の課題ではある。しかしそれだけに留まらず、保健師は地域全体の今後のあるべき姿を長期的な視点で概観し、そのために必要な予防活動に取り組むことの重要性に気付いた実践経験を通じて、公衆衛生看護活動の中核となる学びを得ることができていたと考える。

また、他の保健師は「少人数の職場に異動したことで、役割が増え、自分の知識・技術をフルに活用して対応する」経験から「地域に密着した保健師活動を実感した」との学びを得ていた。本研究の対象者である保健師が所属する市町村は、市町村合併等の名残もあり、保健師が支所等に分散配置されている状況も散見されていた。そのため、中堅期であっても責任が重い立場に置かれていたり、受け持つ地域や業務が広範囲に渡っていたりするケースが多い。このことは、中山間地域の市町村に勤務しているからこそ得られた実践経験と学びであると考えられる。

#### 2. 中山間地域の市町村に勤務する中堅期保健師の現任教育への示唆—実践経験を保健師の成長につなげるために

保健師経験15年以上の者を対象とした質問紙調査では、自分の成長を感じる瞬間について8割以上の者が「仕事で具体的成長が出たとき」「住民から評価されたとき」「上司、先輩、同僚、仲間から評価されたとき」「職場外の人から自分の仕事や専門性が評価されたとき」を挙げていた<sup>1)</sup>。これらは達成感やプラスのフィードバックが伴っていると読み取れる。一方で、本研究における保健師活動を通じて学びを得た実践経験には、援助対象者から拒否的な反応が示されたことや個別援助の失敗を繰り返さないように意識した取り組み、さらには新たな仕事役割の遂行等が含まれていた。これらの経験が成果や効果につながった時、対象者である保健師の中に重要な経験として刻まれていたと推測される。このような結果が導かれた理由として、本研究では前述の調査に比して対象者の保健師経験年数が短いことが影響していると考えられる。さらに、面接調査の利点を活かして対象者の思いを詳細に聞き取ったこ

とにより、学びを得た経験をするようになった契機のみならず、新任期から中堅期における成長の実感につながる実践経験の中身を理解することに役立つ資料を得られたと考える。

保健師の活動と学習のプロセスについては、先行研究では「問題を抱える対象者への個別アプローチから地域の健康課題を見つけ、地域や他者と連携をとりながら地域のしくみづくりを支援することで個別対象者の健康を促進している」とし、「個人および集団との関係構築能力」を獲得しながら熟達していくとされている<sup>16)</sup>。実践経験が保健師としての成長につながるためには、保健師個人の要素と保健師集団全体の要素があるといえる。

保健師個人の要素としては、うまくいかなかった対応や戸惑いを感じたこと等を振り返り、できたこと、できなかったことは何か等を言語化して個人の課題を明らかにすることが大切であろう。これらは、職場外教育(Off-JT)や、職場を離れた自己研鑽(SD)において取り組むことで、自己の課題が明確化され、解決の糸口を掴むきっかけを得る可能性が高い。しかしながら、開催地までの距離が遠く、少人数の職場であるがために、勤務を外れることが困難であることが推測される中山間地域の自治体においては、日常業務を通じた職場内研修(OJT)として日頃から意識的に行われることが必要である。

保健師集団全体の要素としては、例えば、健康課題の明確化と対策の検討や、精神保健ボランティア講座の企画と運営に工夫を凝らしたとの経験等から、住民に役立つ活動となることを目指してPDCAサイクルを回すプロセスを踏まえることが重要である。PDCAサイクルについては、中堅期保健師はその必要性は認識しつつも、保健福祉事業をPDCAに基づいて展開している者は5割程度にすぎないと報告<sup>17)</sup>もある。そのため、PDCAサイクルを常に意識しながら日々の保健師活動を展開することが求められる。

近年、保健師指導者の人材育成プログラムを検討した報告<sup>2)</sup>がなされ、行政保健師のキャリアラダーの検討も行われている。対人援助職の人材育成キャリアラダーを開発したある自治体での取り組みにおいては「キャリアラダーは、組織で専門職の育ちを支え、業務実践の中で専門職として目標をもち、能力開発に取り組んでもらうための手がかり」になると述べられている<sup>18)</sup>。中山間地域の自治体ならではの保健師活動の内容や、保健師に求められる役割を反映して開発・活用されたキャリアラダーは、保健

師個人の要素と保健師集団全体の要素を橋渡しするものとして、保健師としての成長目標を位置付けることにつながると考える。

## V. おわりに

本研究は、A県内の中山間地域の市町村に勤務する中堅期保健師を対象とした研究であり、対象者は10名と少数であった。また、A県内のみで調査を実施したため、地域特性や歴史的背景から蓄積された保健師活動が調査結果に反映されている可能性も考えられる。今後は、本研究の成果を踏まえ、調査規模を拡大すると共に、本研究の対象者が所属する自治体の特性に合わせた現任教育のあり方を、保健師活動の現場と協同して教育研究機関の立場から検討を続ける必要がある。

なお、本研究は、平成24-25年度長野県看護大学特別研究費補助金を受けて行った。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました対象者の皆様に深く感謝申し上げます。また、本研究の推進に関しまして様々なご助言をくださいました、長野県大町保健福祉事務所健康づくり支援課保健衛生係長の市川政恵保健師様に心より御礼申し上げます。

## 文献

- 1) 後藤順子, 菅原京子, 太田絢子他: 山形県における行政保健師のキャリア開発に関する研究. 山形保健医療研究, 11:31-47, 2008.
- 2) 佐伯和子, 平野かよ子, 宮崎美砂子他: 保健師指導者の人材育成プログラムの開発 保健師のキャリアラダーと保健師指導者の人材育成プログラム 保健師指導者の育成プログラムの開発 平成17-19年度厚生労働科学研究費補助金(地域健康危機管理事業)平成19年度総括・分担研究報告書, 11-17, 2008.
- 3) 厚生労働省: 新人看護職員研修ガイドライン～保健師編～, 2011.
- 4) 財団法人日本公衆衛生協会: 中堅期保健師の人材育成に関するガイドラインおよび中堅期保健師の人材育成に関する調査報告書 平成23年度地域保健総合推進事業(全国保健師長会協力事業)報告書, 2012.
- 5) 澤田由美, 土井英子, 上山和子他: 看護職のキャリア形成と学位修得に関わる意向 第1報 地方

- 都市山間部周辺に在住する看護職の動向. 新見  
公立大学紀要, 33:73-80, 2012.
- 6) 財団法人日本公衆衛生協会 保健師のベストプラクティスの明確化とその推進方策に関する検討会:平成19年度地域保健総合推進事業「保健師のベストプラクティスの明確化とその推進方策に関する検討会」報告書, 2012.
  - 7) 細谷紀子:市町村中堅保健師が獲得している施策化に関わる技術・能力とその獲得に影響を与えた経験の特徴. 千葉看護学会誌, 15(2):9-17, 2009.
  - 8) 若杉里実, 安田貴恵子:新任保健師1年目の体験 母子保健事業での住民との関わりに焦点を当てて. 日本地域看護学会誌, 13(2):61-68, 2011.
  - 9) 仲村秀子, 鈴木知代, 佐藤圭子他:指導者と共に参加する新任保健師保健指導技術研修の評価-新任保健師の学び, 学びを助けた要因-. 日本地域看護学会誌, 14(2):130-135, 2012.
  - 10) 関山友子, 青木さぎ里, 千葉理恵他:市町村における新人保健師の入職後1年間に経験した実践内容と到達目標の主観的達成度. 自治医科大学看護学ジャーナル, 11:35-43, 2013.
  - 11) 松下光子, 石丸美奈, 山田洋子:行政保健師が実践経験を通して得ている保健師活動についての学び. 岐阜県立看護大学紀要, 12(1):25-32, 2012.
  - 12) 厚生労働省:地域における保健活動に関する指針. 厚生労働省健康局長通知(平成25年4月19日付け健発0419第1号)別紙, 2013.
  - 13) 佐伯和子, 和泉比佐子, 宇座美代子他:行政機関に働く保健師の専門職務遂行能力の発達-経験年数群別の比較-. 日本地域看護学会誌, 7(1):16-22, 2004.
  - 14) 小川智子, 中谷久恵:行政保健師の職務への自信とその影響要因. 日本公衆衛生雑誌, 59(7):457-465, 2012.
  - 15) 塩ノ谷朱美, 工藤奈織美, 鈴木久美子他:集落が散在している山間へき地における介護予防のための市町村保健師の活動に関する研究. 日本ルーラルナーシング学会誌, 5:17-30, 2010.
  - 16) 松尾睦:保健師の経験学習に関する探索的研究. 神戸大学経営学研究科 Discussion paper, 2010-33, 2010.
  - 17) 永江尚美:保健師はPDCAサイクルを苦手としているのか? 中堅期保健師の人材育成に関する調査研究から. 保健師ジャーナル, 68(5):372-375, 2012.
  - 18) 藤原啓子, 倉岡有美子, 麻原きよみ:横浜市の人材育成キャリアラダー開発の試みとその意義「対人援助職」としての成長を見える化. 保健師ジャーナル, 68(9):780-791, 2012.

